

Open up the future 2024.11.27



子供が拠り所としている概念の実際って何だろう

道徳科上田教諭「しんせつに する よろこび」のご授業では、探究の過程で拠り所とする概念を「道徳的判断力・道徳的心情・道徳的实践意欲・態度」と描かれていることについて協議がなされました。「これらは資質・能力とどう違うのだろうか」「内容項目・価値判断・発達段階等から概念を描くことはできないだろうか」と協議がなされる中で、道徳的価値に迫る際の子供の「葛藤」について話題が及びます。「親切にしたい。けれども……」と子供が葛藤する際、何に葛藤しているのかを顕在化させることが、多面的・多角的に判断することにつながるのではないだろうか」というご意見が出ました。「知らない人だから怖い」「声をかけるのに勇気がいる」「相手は実際どう思っているのだろうか」など様々な葛藤が実際はあるとして、教師の切り返し発問で個々の捉えの違いを明らかにしていくことが、道徳的価値についてさらに深く考える一手になりそうです。よりどころとする概念を手掛かりに、何に葛藤しているのかを顕在化させること、そのために拠り所とする概念を、見いだした子供の実際の姿から描いていくことが、今後より提案性のある道徳科教科提案へとつながっていきそうです。

「詩」の材としての新たな可能性を見いだす

詩集の中から自分の読みたい詩を選び、話し合う中で作家像を見いだすという創作単元に挑戦した廣田教諭。詩の中の「気持ち」「変化」を大切に、ご授業をされました。「命を大事にできる人」など共通性を見いだしていく中で、子供たちが前のめりになっていく姿が見えました。友達の考えに触れることで、「自分の詩はどうか」と自分が選んだ詩を捉え直す姿もありました。協議会の中では、3年生という発達特性に「作家像を見いだす」という活動が合っていたか、「視点の変化や切り替え」という見方が必要だったか、という議論がなされました。まだまだ具体で考える発達段階である3年生。抽象的な思考をどこまで求め、読み深めていくのか。たくさんの感じ方、味わい方がある詩を材とする中で、詩の書かれ方からどれだけ共通項を見いだせるのか。自分の詩を捉え直す一人読みの時間の持ち方。「〇〇な人」という言葉を土台に、共通項から帰納的に作家像を見いだしていく活動については、新たな可能性が感じられました。目の前の子供たちの感性、読みを大切にしながら授業をされた廣田先生。詩の見方を更新しながら、自分のイメージ・思い等と結び付けながら味わっていくことで、他の文学作品の捉えだけでなく、他の文化に触れた時にも汎用されていくのだと感じました。

